

氏名	かわ だ まなぶ 河 田 学
学位(専攻分野)	博 士 (人間・環境学)
学位記番号	人 博 第 298 号
学位授与の日付	平成 17 年 5 月 23 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
研究科・専攻	人間・環境学研究科文化・地域環境学専攻
学位論文題目	フィクションとは何か

論文調査委員 (主査) 教授 松島 征 教授 篠原資明 助教授 多賀 茂

### 論 文 内 容 の 要 旨

「フィクション」はきわめて興味深い文化的事象である。普通「フィクションとは〈虚構世界〉にかんする言説である」という説明がなされるのであるが、〈虚構世界〉とはいったいどんな世界なのだろうか。あるいはフィクションが「うそ」であることを知っていながらも、われわれがフィクションを受容するさいに、喜び、怒り、悲しみといった感情を感じるのはなぜなのだろうか。こういった問題を記号学をはじめさまざまな側面から考察し、フィクションの本質に迫ることが本論文の目的である。

第1章では、言語によるフィクションを題材として、虚構的言説に現れる名辞による「指示」の問題について考察を行った。ラッセルの記述理論分析によれば、たとえば「シャーロック・ホームズ」といった虚構名による、存在しない対象への指示を含む命題はすべて「偽」とされてしまう。これに対してバヴェルを初めとする文学理論家たちは強い反撥を示し、クリプキらの新しい指示の理論、すなわち名と対象とは直接的に結びつけられるとする直接指示の理論を援用し、また同時に、クリプキが様相論理学のための意味論として提出した可能世界意味論を、虚構世界なる「世界」を説明するモデルとして利用することを考えた。当のクリプキ本人は、虚構名による指示を正当な指示とは認めなかったが、それでもわれわれは虚構名を用いて指示(らしき行為)を行うことが可能である。この論文では、クリプキ流に名が「裸の個体」と直接的に結びつけられると考えるという選択肢を断念し、虚構の対象、虚構世界を、「属性」、「命題」といった抽象的概念のみによって作られる「文化的構成物」として捉えるエーコのフィクション観を作業仮説として採用した。すなわち、「世界」という概念を一つの「隠喩」として考えるというアプローチである。これにより、「指示」、「世界」という二つの概念なしでフィクションの理論を構築することがはじめて可能になるのである。また本章では、このように可能世界という概念を利用したエーコ、ライアンらのアプローチについても言及した。

第1章から第2章への橋渡しとして、「虚構テキストをとおしたコミュニケーションを一種の言語行為として考えるアプローチ」(ライアン提唱の理論)について検討を行った。ライアンによれば、フィクションの経験的作者は、虚構世界内に存在する「代理発語者」になりかわって物語行為を行うとされる。一人称の語り手によって語られる物語の場合は、たしかに経験的作者(たとえばコナン・ドイル)が一人称の語り手(たとえばワトスン)になりかわって、物語を書いているということができる。しかしライアン自身も認めるように、このモデルは、非人称の物語(そこでは語り手が誰であるかを特定することができない)の場合にはなじまない。だとすれば、〈一人称の物語〉と〈非人称の物語〉の間には存在論的な様態のちがいがあ、ということになる。本論文ではライアンの主張とは逆に、一人称の物語においても「代理発語者」の概念は比喩的なものにすぎず、その意味において〈一人称の物語〉と〈非人称の物語〉の間には存在論的地位に差異はない、両者は虚構的情報を伝達するための二つの「異なる」モードでしかない、と結論した。このことは、語り手のアリバイについても当てはまる。すなわち、語り手がこれから語る内容をいかにして知りえたかということに関する説明が周到に準備された虚構作品も、そうでない作品も、ともにフィクションとして流通しうる可能性を持っているということとパラレルなの

である。

第2章では、虚構性と現実性が交錯する場としての写真なる表象形式を分析した。写真をめぐっては、写真を他の映像表象とは異なる絶対的な写実性をもった表象である、と考える「リアリズムの写真観」が広く見られる。これは「モノ」の表象としての写真にはあてはまるが、「コト」の表象としての写真にはあてはまらない。そこには虚構性が入りこむ余地があるからである。写真の連続でしかない映画が、フィクションの代表的なジャンルとなりえたのもこのためである。映画は、写真の持つ瞬間性から解放され、「モノ」の次元から「コト」の次元へ移行したがゆえに、高い虚構性をもつことが可能となったのである。映画を物語として考えるさいにかならず「視点」が問題にされるが、映画理論における「視点」なる概念は過度に視覚的な隠喩が入りこんだものである。物語理論でいう「視点」は、視点人物の知りえたことのみが語られるという情報伝達上の一つの視座でしかないのに対して、映画における「視点」では、カメラの位置から誰かが実際に物語世界を見ている、ということが暗に示唆されている。しかし実際の映画を検討すれば、映画における視点も「誰かが何かを見る」視点でないことは明らかである。このようにして本論文では、〈一人称の語り〉と〈非人称の語り〉とが、どちらも虚構的情報を伝達するためのモードであるという意味において対等であるのと同じように、映画によるフィクションの場合も、虚構的情報を伝達するメカニズムであるという点において言語によるフィクションとつながっている、という結論に達した。すなわち、言語的フィクションにおける語りを「語る主体」という隠喩から解放し、映像を用いたフィクションにおける語りを視覚的比喩から解放することによって、両者ははじめて統一的に理解されるのである。本論文では、その両者が収斂する一点を「物語伝達機構としてのフィクション」とであると結論した。

第3章では、以上の考察をもとに、フィクションに対するわれわれの感情的反応の問題について考察を行った。第1章および第2章の結論によれば、フィクションが伝達するのは虚構的情報であり、虚構世界とは諸命題のいわば束としてのみ想定されるものであった。しかし、「もし××であったならば……」という事実と反する仮想がわれわれに感情的影響を与えることを考えてもわかるように、本論文で検討してきた「文化的構成物としてのフィクション」、「虚構的情報を伝達するメカニズムとしてのフィクション」というフィクション観は、フィクションがもたらす感情的作用を説明する上での障害とはならない。以上のような観点から、「虚構的情報の伝達機構」としてフィクションをとらえるフィクション観を提唱したことが、本論文の特色である。

#### 論文審査の結果の要旨

本学位申請論文は、「フィクション（虚構世界言説）」と呼ばれる文化事象（あるいは文化的制度）の存立基盤を、さまざまな学問領域の視点を借りて解釈し分析しようとする、きわめて意欲的な試みである。この「フィクション」にまつわる種々の問題は、従来、文学者の観点からはコウルリッジが、哲学・論理学の観点からはバートランド・ラッセルが、言語行為論の観点からはサール、マコーミック、カーリーが、可能世界意味論の立場からはクリプキ、ライアン、エーコらが論じてきた問題であるが、申請者はこれらさまざまな学問的立場を統合しつつ、それらの止揚と統一を図ったという点に大きな意義がある。学位申請論文の序章において、申請者はフィクションにまつわる問題を次のような4点に要約している。

- ① そもそも「シャーロック・ホームズ」や「ハムレット」のような虚構名は何を指示するのか。（虚構言説の最小単位である「語」の問題）
- ② 「虚構世界」とは、いったいどのような世界なのか。「現実世界」とはどのような関係にあるのか。（虚構言説を構成する最大の単位「テキスト」の問題）
- ③ 言語によるフィクション（小説）は、映像によるフィクション（映画）とどのような関係にあるのか。（テキストの表象形式の問題）
- ④ 虚構言説においては、日常生活の現実とはかけはなれた出来事が語られるが、われわれはなぜそのような非現実の物語に興味を示し、情緒的反応を示すのか。（テキストの受容に関する問題）

まず「言語によるフィクション」と題された第1章においては、上記①の問題（すなわち、虚構言説の最小単位である「語」の問題）が検討されている。虚構名による「指示」referenceを否定したラッセル、クリプキらの見解は、彼らの指示の理論からの論理的な帰結であると考えられる。申請者はこれに対して、虚構世界を「文化的構成物」cultural construct

ととらえるウンベルト・エーコの作業仮説を対置する。「世界」を一つのメタファーと見なすことによって、フィクションの理論を構築することが可能になる、というわけである。虚構世界を「文化的構成物」としていったん認めてしまえば、あとは可能世界としてのさまざまな応用研究が可能となる。これは上記②の「虚構世界とはいったいどのような世界なのか。それは現実世界とはどのような関係にあるのか」という問題に連動するものである。

丸山圭三郎に云わせれば「人間は嘘をつく動物」であり、人間のつく嘘のなかでも「フィクション」（小説・映画など）は最高に洗練された文化表象である。本論文はこれまで踏査されることのあまりなかったこの文化的領域に焦点を当て、学際的な眼差しのもとに、質の高い議論を展開している。とりわけフィクションの問題に関連する学問的系譜を整理し、哲学・記号論理学・言語行為論・可能世界意味論・映像論など、幅広い分野の学問的知見を動員しながら、整合性の高い考察を加えている点は高い評価に値する。

なお、第1章の前半は、日本記号学会編『記号学研究21—コレクションの記号学』（2001年、東海大学出版会）に加筆・修正したものである。第1章後半の「エーコにおける可能世界＝虚構世界」は、日本記号学会第18回大会（1998年5月）におこなった研究発表をもとに文章化したものである。

「映像を用いたフィクション」と題される第2章では、まず「写真とは何か」という問題が提起される。つまり、上記③の「言語によるフィクション（小説）は、映像によるフィクション（映画）とどういう関係にあるのか」という問題がここで検討される。「リアリズム的写真観」（写真を絶対的な写実性をもった映像表象とみなす考え方）は、「モノ」の表象としての写真にはあてはまっても、「コト」の表象としての写真（そこには虚構性が入り込む余地がある）にはあてはまらない。映画は、写真を連続的に映写する際に生じる残像効果に依拠するものであるが、モノの次元からコトの次元へと移行することによって、高い虚構性を獲得するからである。第1章では、記号論理学や可能世界意味論の知見に基づく抽象的な論理が展開されたのにひきかえ、この第2章では、ゴダールやヒッチコックの映画作品におけるカメラワークの例や、森村泰昌のパフォーマンス（Mのセルフ・ポートレイト No. 72, 別名「駒場のマリリン」）における虚構性の問題が扱われており、きわめて示唆に富むものである。一例として、映画における「カメラ目線」の禁止についての考察がある。この「カメラ目線」は、ジェラルド・ジュネットがその物語研究において「メタレプシス」と呼んだものと相同的な関係にある、と申請者は述べる。両者はともに、フィクションの異なるレベル間での「越境行為」なのである。

このように、一方では「代理発語者」というライアンと言語行為的フィクション論をバルトやジュネットの物語研究（ナラトロジー）の理論とつきあわせ、他方ではカリーの「想像的観察者仮説」を精密に検討することによって、申請者は、映画のフィクションにおける語りを視覚的な比喩から解放することに成功した。ここに申請者の提示する映画論のオリジナリティがあると考えられる。

第3章では、上記④の「虚構言説においては、日常生活の現実とはかけはなれた出来事が語られるが、われわれはなぜそのような非現実の物語に興味を示し、情緒的反応を示すのか」というテキストの受容に関する問題が検討されている。この場合、「文化的構成物としてのフィクション」というウンベルト・エーコの作業仮説が、フィクションに対する感情的反応の説明に有効である、と申請者は述べる。このように「虚構的情報を伝達するメカニズム」としてフィクションをとらえるという視点は従来のフィクション論にはなかったもので、そこに申請者の独創的見解が見られるのである。

このように本論文は、多様な学問分野のあいだに橋を架け、インターディシプリナリな作業を敢行したという意味において、人間・環境学研究科文化・地域環境学専攻の趣旨にふさわしい試みであると言えるだろう。

よって

本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成17年3月9日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。